七　舞へ〳〵かたつむり

舞へ〳〵かたつむり

梁塵秘抄

舞へ〳〵かたつむり、舞はぬものならば、うまの子やうしの子にくゑさせてむ、踏みわらせてむ、まことに美しく舞うたらば、花の園まで遊ばせむ。

まつの木かげに立ちよりて、岩もる水をむすぶまに、扇の風も忘られて、夏なき年とぞ思ひぬる。

池の涼しきみぎはには、夏のかげこそなかりけれ、こだかきまつを吹く風の、声も秋とぞ聞えぬる。

遊びをせむとや生まれけむ、たはぶれせむとや生まれけむ、遊ぶ子どもの声聞けば、わが身さへこそゆるがるれ。

日光

一

もろ手そろへて日の光すくふ心ぞあはれなる。

すくへどすくへど日の光、

光りこぼるる、音もなく。

二

光りかゞやく何ものかにぎりしめんとす、日もすがら。

光りかゞやく空中に手をにぎりしめ、また開き。

三

何かおどろき、見まはせど、

かゞやくものは日の光。

ふっともらししため息をわがものぞとは人知らず。

四

光あふるるつたかづら、

ゆりうごかすは日の光。

たゞ日の光、日のしづく。

ひがらとつばき

つばきにひがらが飛んで來た。

あれ、あれ、空見てないている。

七　鍾へ〳〵かたつむり

つばきの花がさみなあかい、
重なり重なり咲いている。

ひがらの頭は動いてる。
なく時、なく時、動いてる。

つばきの花がさゆれだした。
花から花へとゆれだした。

花から花へとゆれだせば、
どの葉もどの葉もゆれだした。

枝から枝へと飛び〳〵に、
ひがらはなき〳〵遊んでる。

ひがらはどんなにうれしかろ、
つばきもどんなにうれしかろ。

（北原白秋の作による）

八　カバチエッポ、